

松 山 大 学 論 集  
第 35 卷 第 4 号 抜 刷  
2 0 2 3 年 10 月 発 行

松山大学人文学部社会学科1年生の  
文章読解力をめぐる一考察  
—— 学生の3割は中学校の教科書が読めない ——

市 川 虎 彦

## 研究ノート

# 松山大学人文学部社会学科 1 年生の 文章読解力をめぐる一考察

—— 学生の 3 割は中学校の教科書が読めない ——

市 川 虎 彦

## 1 2022 年度社会学科基礎演習の学生

松山大学は愛媛県松山市に存する私立大学で、1923 年に松山高等商業学校として創立された。2023 年には、創立 100 周年を迎える四国の伝統校である。商科大学から発展し、現在では経済学部・経営学部・人文学部・法学部・薬学部の 5 学部を有する大学となっている。その中、人文学部は社会学科と英語英米文学科によって構成されている。

社会学科の定員は 125 名である。かつては、一般入試、センター試験利用入試と並んで指定校推薦入試が設けられていた。2022 年度入試から、この指定校推薦入試制度が廃止され、入学者は全員なんらかの学力試験を合格したものだけになった。

2022 年 4 月になって、1 年生必修の基礎演習が始まった。学力試験合格者のみになったので、極端に能力の低い学生はいなくなったであろうと予想していた。ところが案に相違して、連続して無断欠席をする、課題を出してもやってこない、演習なのに発言を求めても「特にありません」を 1 年間繰り返して終える、自分の報告があたっていても無断欠席する、あるいは準備してこない、エクセルのデータ入力が異様に遅い、何度説明してもエクセルを用いて図表を

作成するということができない、というような学生が存在した。

これまでも、そうした学生は少数ながらいた。そうした学生に関しては、一般入試と異なる入試制度で入学した学生であろうと、気に留めずに来た。ところが、学力試験に合格した学生のみのはずなのに、こうした学生が存在し、その上例年よりも人数が多かった。

これはいったいどういうことなのであろうか。あまりにも不審であったので、今年度の1年生は学力試験に合格した学生だけになったはずなのに、学力も学習意欲も低い学生が存在するということを、ある政権幹部に話してみた。すると、その幹部教員は「社会学科は実質全入になっているので」と回答してくれた。これで、筆者の疑問は氷解した。それならば、学力の低い学生がいても不思議でもなんでもない。筆者は学内行政に関心をもてない性質なので、社会学科が全入に近い状態に立ち至っているということを、迂闊にも認識していなかった。また、各社が公表している大学難易度でも、松山大学社会学科はまだ「Fランク」や「BF（ボーダーフリー）」に評定されていないということもあった。というわけで、当時はあまりの不可思議さに、社会学科1年生の基礎能力がどの程度のものか調べてみたくなったのである。そうして、実際にそれを試みてみた。

全入に近い状態というのであるならば、以下に紹介する試みをやる意味もなかったといえる。しかし、社会学科1年生の基礎的読解力がどのような状態にあるのかを示しておくことに、まったく意義がないわけでもないだろう。2022年10月に行った筆者の試みとその結果について、以下に述べていくことにする。

## 2 新井紀子氏の基礎的読解力調査

話をもとにもどす。全学生が学力試験を合格して入学してきているのに、能力も意欲も低い学生が、あまりにも目立つ。これは、どういうことなのか。いったいどのような学生が入学してきているのであろうか。これが根本的な疑問で

あった。後に、この認識自体が誤りであったと気づくのだが。その時は、前述のごとく、あまりにも不可思議すぎたため、どのような学力の学生が入学してきているのか調べてみたくなった。そこで思い浮かんだのが、2018年に刊行された新井紀子著『AI vs 教科書が読めない子どもたち』である。この著作は、教育現場を超えて、広く社会全体に反響を呼んだ<sup>1)</sup>。それは、日本の中高生の5割以上が、教科書の日本語が読めていないという事実をあきらかにしたからである。

新井氏は「誰もが教科書の記述は理解できるはず」という前提に疑問をもち、中高生の基礎的読解力を調査するリーディングスキルテストを開発した。それを全国2万5,000人に対して調査したのである。「問題は、東京書籍の英語と国語を除く高等学校と中学校の教科書、毎日新聞、東京・中日新聞、読売新聞の3紙の主に科学面や小中学生向けの記事を使って」作成されたという<sup>2)</sup>。国語の教科書が除かれているのは、国語の教科書に所載される論説文や小説の中には難解な文章も混じってくるためである。社会科や理科の教科書ならば、誰が読んでも理解できるように書かれているはずであり、これが読めなければ教科の理解に重大な支障を生じさせるからである。

リーディングスキルテストは、パソコンないしタブレットで実施されるという。そして、全員が同じ問題を解くわけではなく、被験者各人に対して用意されている数百問から無作為に問題が選ばれて示されるという。1問解答すると、また問題が無作為に出現する仕組みになっている。

『AI vs 教科書が読めない子どもたち』には、このリーディングスキルテストの実際の問題がいくつか例示されている。また、中高生の正解率が示されている問題もある。これを用いれば、社会学科1年生の読解力が、中高生と比べてどの程度なのか、見当がつくと思に至った。

なお、これから「高校生」という用語が頻出する。この「高校生」には、卒業した女性の7割が性的サービス産業に従事するというような底辺校<sup>3)</sup>の高校生は含まない。被験者となったのは、進学率ほぼ100%の進学校で「90分間 AI

の話に興味深く静かに聞くことができる高校生」(前掲書 P. 196) だという。であるからこそ、半数が教科書を読めていないという事実が、衝撃をもって受け止められたのである。

### 3 試験問題と試験方法

後期に開講される「社会学入門Ⅱ」という科目は、社会学科1年生の必修科目で、社会学科教員が1回ずつ持ち回りで講義を担当する科目となっている。この科目の筆者担当回の冒頭で、簡易版の読解力試験を行うことにした。実施したのは、2022年10月31日4時間目である。以下にその問題を示す。全部で12問、『AI vs 教科書が読めない子どもたち』に掲載されていた問題を使用した。もし、事前に『AI vs 教科書が読めない子どもたち』を読んだことがある学生がいたら、かなり有利になったであろう。しかし、そのような学生は皆無であろうし、もし読んでいる学生がいたならばこの種の問題に関心をもつ学生であり、もともと読解力に優れた学生であることが予想される。よって全体に与える影響はないと考えられる。問題は5分もあれば解けると思われたけれども、解答時間を10分に設定した。リーディングスキルテストとは異なり、紙に印刷して、全員が同じ問題を解いた。また、リーディングスキルテストは1問解答すると、次の問題が現われるという方式になっているけれども、紙なので被験者は難しいと感じた問題を飛ばすことも可能になる。問題を次に示す。

問1 次の文を読みなさい。

エベレストは世界で最も高い山である。

上記の文に書かれたことが正しいとき、以下の文に書かれたことは正しいか。「正しい」、「まちがっている」、これだけからは「判断できない」のうちから答えなさい。

エルブルス山はエベレストより低い。

1 正しい	2 まちがっている	3 判断できない
-------	-----------	----------

問2 次の文を読みなさい。

仏教は東南アジア、東アジアに、キリスト教はヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアに、イスラム教は北アフリカ、西アジア、中央アジア、東南アジアにおもに広がっている。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

オセアニアに広がっているのは（ ）である。

1 ヒンドゥー教	2 キリスト教	3 イスラム教	4 仏教
----------	---------	---------	------

問3 次の文を読みなさい。

Alex は男性にも女性にも使われる名前で、女性の名 Alexandra の愛称であるが、男性の名 Alexander の愛称でもある。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

Alexandra の愛称は（ ）である。

1 Alex	2 Alexander	3 男性	4 女性
--------	-------------	------	------

問4 次の文を読みなさい。

アミラーゼという酵素はグルコースがつながってできたデンプンを分解するが、同じグルコースからできていても、形が違うセルロースは分解できない。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適切なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

セルロースは（ ）と形が違う。

- |   |      |   |       |   |       |   |    |
|---|------|---|-------|---|-------|---|----|
| 1 | デンプン | 2 | アミラーゼ | 3 | グルコース | 4 | 酵素 |
|---|------|---|-------|---|-------|---|----|

問5 次の文を読みなさい。

幕府は、1639年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた。

上記の文が表す内容と以下の文が表す内容は同じか。「同じである」「異なる」のうちから答えなさい。

1639年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた。

- |   |       |   |     |
|---|-------|---|-----|
| 1 | 同じである | 2 | 異なる |
|---|-------|---|-----|

問6 次の文を読み、メジャーリーグ選手の出身国の内訳を表す図として適切なものをすべて選びなさい。

メジャーリーグの選手のうち28%はアメリカ合衆国以外の出身の選手であるが、その出身国を見ると、ドミニカ共和国が最も多くおよそ35%である。

(図省略)

問7 次の文の内容を表す図として適切なものを、①～④のうちからすべて選びなさい。

原点0と点(1, 1)を通る円がx軸と接している。

(図省略)

問8 次の文を読みなさい。

天の川銀河の中心には、太陽の400万倍程度の質量をもつブラックホールがあると推定されている。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

天の川銀河の中心にあると推定されているのは（ ）である。

1 天の川	2 銀河	3 ブラックホール	4 太陽
-------	------	-----------	------

問9 次の文を読みなさい。

火星には、生命が存在する可能性がある。かつて大量の水があった証拠が見つかっており、現在も地下には水がある可能性がある。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを1つ選びなさい。

かつて大量の水があった証拠が見つかっているのは（ ）である。

1 火星	2 可能性	3 地下	4 生命
------	-------	------	------

問10 次の文を読みなさい。

義経は平氏を追いつめ、ついに壇ノ浦でほろぼした。

上記の文が表す内容と以下の文が表す内容は同じか。「同じである」「異なる」のうちから答えなさい。



平氏は義経に追いつめられ、ついに壇ノ浦でほろぼされた。

1	同じである	2	異なる
---	-------	---	-----

問11 次の文の内容を表す図として適当なものをすべて選びなさい。

四角形の中に黒でぬりつぶされた円がある。

(図省略)

問12 次の文を読みなさい。

2で割り切れる数を偶数という。そうでない数を奇数という。

偶数をすべて選びなさい。

1	65	2	8	3	0	4	110
---	----	---	---	---	---	---	-----

#### 4 試験の全般的結果

結果の検討に入る前に、被験者となった社会学科1年生はまじめに試験に取り組んだのであろうか。いくら簡単な問題だとはいえ、成績に関係のない試験であるため適当に回答した学生が多くいたということはないのかどうか。中高校生のリーディングスキルテストの成績が惨憺たるものだったので、新井氏は多くの人から「『中高校生の中には反抗期の生徒もいて、成績に関係ないようなテストは真面目に取り組まなかったのでは?』という質問をよく受け」(前掲書P.197)たそうである。大学生ならば、なおのことである。新井氏は問2の解答結果を例に、それを否定している。表1は、今回の社会学科1年生の解答結果と『AI vs 教科書が読めない子どもたち』に掲載されていた中高生の結果を並置してみたものである。

問2の問題文には「ヒンドゥー教」が出てこない。それゆえ、「誤答にヒン

ドゥー教が少ないのは、多くの生徒が真面目に問題に取り組もうとした証拠」（前掲書 P. 197）であると、新井氏は述べている。不真面目に解答した生徒が多ければ、「ヒンドゥー教」がもっと多くなるはずだということである。

社会学科1年生も、「ヒンドゥー教」と解答したものは1名、率にして1%である。そればかりでなく、誤答の比率の傾向が中高生と瓜二つである。このことから、ほとんどの学生が、試験にまじめに取り組んだと判断してよいと思われる。

1年生ではなく、2年生（つまり再履修の学生）の中に1名、白紙で提出した学生がいる。まったくやる気がなかったということである。当該学生は、2021年度後期試験の地域社会学の試験も白紙で提出している。ちなみに地域社会学の試験の回答方式は、マークシート式である。この学生は、読解力云々以前に、なにかしらの重大な欠陥を抱えていると思われる。

表1 問2の解答割合

	社会学科1年生	全国高校生	全国中学生
①ヒンドゥー教	1%	2%	5%
②キリスト教	81%	72%	62%
③イスラム教	5%	6%	12%
④仏教	14%	21%	20%

注) 中学生 623 名・高校生 745 名

表2は、解答した問題の数の分布である。12問目まで到達した学生が3分の2ということになる。試験の終盤になって、軒並み誤答という解答用紙がいくつもあった。時間が足りなくなったところで、適当に数字を埋めたと思われる。無理して数字を埋めたということは、ある意味、真剣に試験に取り組んだということでもあろう。いずれにせよ、実際に最後まで解答し終えた学生は、もう少し少ないはずである。

表2 解答数の分布

解答数	6	7	8	9	10	11	12
度数	5	6	8	11	3	3	67
%	4.9	5.8	7.8	10.7	2.9	2.9	65.0

表3は、正解数の分布である。残念ながら全問正解は0人で、最高は11問正解（4人）であった。また、最低は2問正解（1人）であった。平均値は7.4問となる。

表3 正解数の分布

正解数	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
度数	1	4	6	12	10	13	21	19	13	4
%	1.0	3.9	5.8	11.7	9.7	12.6	20.4	18.4	12.6	3.9

社会学科1年生で、今回の試験を受けたのは103名(男子34名・女子69名)である。この中、10点以上とった学生は17名(男子7名・女子10名)、6点以下の学生は33名(男子11名・女子21名)で、率にして32.0%であった。半分以上の正解では、中学校の教科書が読めていない可能性が高い。すなわち、社会学科1年生の3割は、中学校の教科書が読めていない。あるいは、日本語を読む速度がかなり遅い。

問題数が少なく、これだけで判断すべきではないという意見はもっともある。しかし、後述するように、高校生の正解率と比較可能な問題でみると、どの問題でも社会学科1年生の方が、10～20ポイント、正解率が高い。これに規則性がなかったら、慎重に吟味する必要がある。どの問題に対しても同じ傾向を示しているので、問題数を増やしても全体の傾向に変わりはないと考える。

表4 各問の正解率(%)

	問1	問2	問3	問4	問5	問6
103を分母にした正解率	66.0	80.6	74.8	37.9	93.2	55.3
回答者の正解率	66.0	80.6	74.8	38.6	93.2	55.9

	問7	問8	問9	問10	問11	問12
103を分母にした正解率	49.5	83.5	73.8	59.2	55.3	10.7
回答者の正解率	52.0	92.5	89.4	84.7	82.6	16.4

表4に示したとおり、最も正解率が低かったのは、問12である。正解率は、解答した学生でみると16.4%である。正解は「2, 3, 4」。誤答のほとんどは「2, 4」という回答である。社会学科1年生は、「0」を偶数と認識していない学生が多数派であった。これは読解力の問題というよりも、愛媛県の小学校算数教育に欠陥があるといえる。

次に正解率が低かったのは、問4の「アミラーゼ問題」である。この問題は、「これまで作問した中で難易度がとても高かった」(前掲書P.203)と新井紀子氏自身が述べている。社会学科1年生でも、問4は正解した学生の方が少なかった。男子学生2名は、この問題を飛ばしていた。この種の学生は、少し込み入った文章になると、飛ばし読みをする癖がついている可能性がある。

次に各問の解答に関する検討に移りたい。

## 5 各設問に関する検討～高校生よりはよい成績だけれど～

### 5-1 問1・問2

試験前まで、問1・問2に関しては、この問題をまちがえる大学生はいないだろうと思っていた。しかるに、問1の正解率は66.0%であった。実に3分の1の学生が誤答という、眼を疑うような結果であった。採点しながら「『正しい』に決まっているだろう!」と叫びたくなった。最初の問題であり、あまりにも簡単すぎて、何かのひっかけ問題と思った学生がいたのであろうか。

問2は問1よりも正解率が上がり、80.6%であった。問2に関しては、『AI vs 教科書が読めない子どもたち』の中に中学生と高校生の正解率が提示されている。表1に示したとおり、中学生62%・高校生73%が正解している。社会学科1年生は80.6%なので、高校生よりも正解率が高い。しかしこれは、正解率が高校生を上回ったと喜ぶよりも、この簡単な問題を2割の学生が不正解であったと嘆くべきであろう。

## 5-2 問3・問5・問6・問7～中高生との比較

問3・問5・問6・問7も、中高校生の正解率が示されている。それと社会学科1年生の正解率を比較したものが表5である。

表5 問3・問5・問6・問7の正解率の比較(%)

	社会学科1年生	全国高校生	全国中学生
問3	75	65	38
問5	93	71	57
問6	55	28	12
問7	50	32	19

問6と問7は、本稿では図を省略してある。問6は4つの円グラフから正解を選ぶ形式、問7はx軸・y軸に円が4通りの重なり方をしている中から正解を選ぶ形式になっている。問6は「メジャーリーグの選手のうち28%はアメリカ合衆国以外の出身の選手である」とあるので、アメリカ合衆国出身選手の比率は72%である。選択肢の円グラフのアメリカ合衆国の部分をみると、選択肢1は「720人」、2は「72%」、3は「36.6%」、4は「28%」となっている。すぐに正解が選択肢2であるとわかる。であるから、「 $0.28 \times 0.35 =$ 」という計算をして「ドミニカ共和国」の比率を出す必要もない簡単な問題になっている。問6は4者択一問題であるので、正答率12%の中学生はでたらめに数字を選ぶよりも低い正答率、正答率28%の高校生は無作為に選択したのと変わ

らない正答率ということになる。繰り返しになるけれども、「高校生」とは進学校の高校生である。これは、たしかに衝撃的な結果である。

社会学科1年生はというと、問3-74.8%・問5-93.2%・問6-55.3%・問7-49.5%となっている。社会学科1年生の方が、それぞれ正答率で10～20ポイント高校生を上回っている。

新井氏は、問2「仏教問題」と問3「Alex問題」は生徒の能力値が上がるにしたがって正答率が直線的に上昇していくことを報告している。つまり学力が上がるのに比例して正解する生徒の比率が増えていく。それに対して問6「メジャーリーグ問題」と問7「円の問題」は、「能力値が下位から中の上までは区別がつかなくて、上位になってようやく正答率が上がり始める」（前掲書P.211）としている。このような問題は、新井氏によって「能力上位層をよく識別する問題」と名づけられている。社会学科1年生には、「能力上位層」が半数程度いるということになる。これも、半数が「能力上位層」であると喜んでいいのか、「能力上位層」が半数しかいないと悲しんだらいいのか、微妙なところである。

おそらく入学試験による選抜機能が働いている国立大学であるならば、「メジャーリーグ問題」も「円の問題」も、正答率が90%を超えてくるのであろう。

## 6 読解力をもつ学生はどこから来るか

1つ言えることは、松山大学社会学科にも、相応の読解力をもつ学生が入学してきているということである。では、簡易版読解力試験で高得点（10点以上）をとった学生は、どのような学生であろうか。このことをあきらかにするために、聞き取りを試みた。

1人の女子学生は新居浜市内の最も偏差値が高い高校の出身であった。なぜ松山大学に進学したのか聞いてみると、大学入学共通テストの得点が伸びず、愛媛大学法文学部を受験したが落ちてしまった。松山大学は3学部すべてに合

格し、社会学科と法学部のどちらに進学するか迷った末、社会学科に決めたという。県外の私立は考えなかったのか聞いたところ、授業料や他の生活費等の負担も考えて県内の松山大学にしたという。もう1人の女子学生は八幡浜市内の進学校出身である。事情は瓜二つである。共通テストがうまくいかず、愛媛大学が不合格であったため、松山大学に進学したという。法学部と社会学科で迷ったところまで同じであった。こちらの学生は、国立であったならば県外でもいいと、親から言われていたという。

高得点の男子学生では、西条市内の進学校出身の学生がいた。国立大学は県外の大学を受験した。県外の大学を選んだのは、一度、県外に出てみたかったからだという。しかし、結果は不合格であった。親は、国立大学であるならば県外でもいいといていたという。私立大学なら、家計負担の面などから県内の松山大学にしてほしいとのことであった。自分の下に進学希望の兄弟がいるため、今後さらなる教育費の負担が予想されるという事情もあったという。結局、親の希望を受け入れ、社会学科への進学を決めたというわけである。

新井紀子氏は、高校生の平均点をみて、それが学年を経るにしたがって上昇していないことから、「読解能力値は高校では向上していない」(同上書 P. 228)と結論づけている。このことからすると、社会学科1年生の正答率が高校生よりも良好なのは、大学入学以後の半年間の教育で全体的に底上げされた結果とみることはできない。そもそも、社会学科では基礎的読解力の改善を目的とした授業は行われていない。聞き取りに回答してくれたような最初から基礎的読解力を備えた学生が、ある程度の人数、入学してきているためであろう。すなわち、国立大学に合格できるかどうかの境界線上にいないような高校生が、それに不合格であった場合、今のところ松山大学社会学科に入学してくれていることが大きい。

この種の学生が、松山大学社会学科に進学してくれているのは、第1に松山大学が四国の伝統校だということがあるだろう。国立大学に不合格であった場合、次善の策として選択される地位を確立してきたと言える。田舎の県には、

県内に進学したいと思える私立大学が存在しないところもある。例えば、筆者は高校に入学した年の4月に、地理の教師が「この高校に合格するような者であれば、県内の私立大学は、今、受験しても合格できる」と話すのを聞いた。これは、筆者の進学した高校が極めて優れていたというわけではなく、それだけ県内私立大学の難易度が低かったということである。当然のことながら進学校の生徒の選択肢となりえる大学ではなかった。筆者が卒業した高校からは、当該大学を誰も受験しなかったと思う。逆に松山大学社会学科は、県内高校生の進学対象の大学となっている。

第2に、松山大学が地理的な障壁によって守られているということがある。愛媛県は橋で本州と結ばれているとはいえ、新幹線も通っておらず、東京や関西、福岡が心理的に遠距離に感じられる地域となっている。地元志向の高校生が相対的に多くなるように見受けられる。これが筆者の出身県である長野県となると、東京に近い分、大学進学とは上京することと等しくなってくる<sup>4)</sup>。こうした地方では、医学部は別格として、田舎くさい地元国立大学は人気がない。高校生は、きらびやかな都会での華やかな学生生活を夢想しながら、受験勉強をするのである。それが実現するかどうかは別として。それゆえ、将来、県内で小中学校の教員をしたいという高校生以外は、地元国立大学を第1志望にする者はほとんどいないのではないだろうか。

第3に、地理的障壁と関連して、愛媛県では21世紀になっても高校生の親世代が旧弊な意識に囚われていることがあろう。関東甲信越の親世代であれば、自分の子息がある程度の進学校に入学した段階で、卒業後は親元を離れることを覚悟するはずである。もちろん、愛媛県でも最上位の進学校、愛光だとか松山東高の場合は同じであろう。旧帝大や早慶のような高偏差値私立大学が愛媛県内にない以上、こうした高校の教諭の進路指導は県外大学への進学を目指させるものとなる<sup>5)</sup>。その次の水準の進学校の親となると、なるべくなら県内の大学に進学してほしいという願望を抱く者が存在するようになるようである。紹介した事例にもみられるように、特に子どもが女子である場合、そうい



う気持ちを抱く親が多いように見受けられる。

東京と陸路や鉄道で結ばれている関東甲信越地方は、そうした心理的障壁がない。いつでも親が上京することができるし、学生が親元に帰ることも容易である。また、関東甲信越地方の家庭だと、東京に1軒や2軒、親族が暮らしているのがふつうである。こうしたことで、進学先が県外になることに抵抗感がない。

第4に、これも地理的障壁と関連する事項で、金銭面の問題がある。聞き取りに応じてくれた学生が異口同音に述べていたことでもある。大都市圏の大学に行けば、家賃水準が松山市内よりかなり上昇する。帰省費用も回数を重ねれば負担になってくる。国立大学であるならば、所得が低い世帯向けの授業料減免の制度があり、格安寮費の学生寮も用意されている。国立大学の寮はかつては学生運動や新左翼運動の巣窟であり、今でもおそらくアパート住まいとは異なる煩わしさや不自由さがあるに違いない。しかし、それさえがまんすれば、低所得世帯の子弟でも十分に進学は可能である。これが私立大学だとそうはいかない。そこに長引く不況の影響が覆いかぶさる。私立ならば県内という選択に至らざるを得ない学生も一定程度存在することだろう。

以上のようなことが関係しあって、基礎的な読解力を持つ学生の社会学科入学につながっていると考える。そして、それによって、まがりなりにも高校生以上の平均点を得ることを可能としている。

## 7 結論～社会学科1年生の基礎的読解力から見えてくるもの

最後にもう一度、松山大学社会学科1年生の基礎的読解力の現状を確認してみよう。社会学科1年生の基礎的読解力は、平均値でみれば高校生の平均値を1～2割上回る。ただし、日本の高校生の読解力がきわめて低いため、高校生を上回ったからといって安心できる水準ではけっしてない。また、優秀な読解力（今回の試験で10点以上）をもつ学生は少数にとどまる。しかし、一定の読解力（同8～9点）を有した学生が入学してきているといえる。このため、

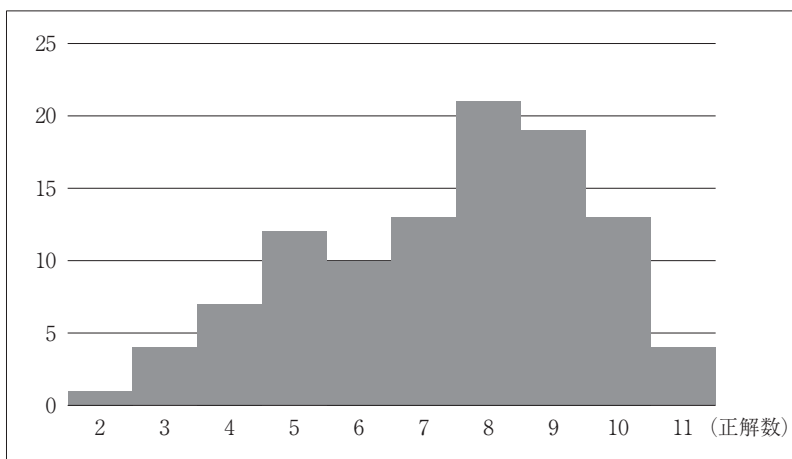


図1 社会学科1年生の正解数の分布（人）

高校生の正解率を上回る成績を出せているのだと考えられる。

8～9問正解に得点分布の頂上があり、7問正解あたりで得点分布が途切れるならば、入学試験が選抜機能を有しているということになる。国立大学の場合は入試で学生が選抜されているため、ある点数以下の学生がほとんどいない、というような分布図になると予想される。しかるに松山大学社会学科の場合、その後も低得点方向に向かって分布が続き、5問正解のところに小山ができて、裾野はさらにその先へと広がっていつてしまっている。

社会学科では、入試による選抜機能が働かなくなっているのです、かなり読解力の低い学生まで入学してきている。結果、難関進学校から底辺校まで学力別に生徒が振り分けられる高校のような均質な学生層ではなく、上位から下位まで多様な生徒が存在する公立中学校のような学生層になってしまっている。同じ大学の同じ学科の学生であるにもかかわらず、学生間の能力差が大きいというのは、講義や演習で教員が抱く実感と適合的なのではないだろうか。

この先、少子化の影響で、松山大学の入試難易度はさらに低下していくこと

が予想される。そうすると、読解能力値の得点分布は図1の左方向(低得点側)にその頂きが移動していくにちがいない。中学校の教科書が読めない学生が多数派の学科となっていくのである。

新井紀子氏は、「近年、大学でも高校でも『アクティブ・ラーニング』の重要性が頻りに強調されています」(前掲書P.234)と述べ、「つまり、教えてもらうだけではなくて、自分でテーマを決めたり自分で調べたりして学習したり、グループで話しあったり議論したり、ボランティアや職業体験に参加したりというのがアクティブ・ラーニングだということです」(前掲書P.235)と、アクティブ・ラーニングを紹介している。その上で、「教科書に書いてあることが理解できない学生が、どのようにすれば自ら調べることができるのでしょうか。自分の考えを論理的に説明したり、相手の意見を正確に理解したり、推論したりできない学生が、どうすれば友人と議論することができるのでしょうか」(前掲書P.235)と、アクティブ・ラーニング懐疑論を展開している。新井氏は、中高生の読解能力値からすれば、アクティブ・ラーニングはすべての公立中学で無理であり、高校でも可能となるのはごく一部のエリート進学校に限られるとしている。その通りなのであろう。

これは、大学にも当てはまる。読解能力値の低い学生が主流になれば、ゼミでの報告や討論が成り立たず、ゼミ活動は有名無実となるであろう。冒頭に述べたように、以前からゼミで「特にありません」「だいじょうぶです」を1年間繰り返すだけの学生はいた。質問や意見を一度も述べることもない学生である。これまでは、やる気のない学生だと思っていた。やる気がない以上、どうにも対処のしようがないと。しかし、今回の試みを実行し、新井氏の著書を通読していく中で、「やる気」の問題ではなくて「能力」の問題なのかもしれないと思うようになった。すべて「特にありません」の学生は、ゼミに参加する気がなく、報告を聞き流し、ただ座って時間が過ぎるのを待っているのだらうと、これまでは思っていた。もしかしたらその種の学生は、報告を理解できず、ゆえに発言する内容を何一つ考えつくことができず、「特にありません」

と言うしかないのかもしれない。

また、中学校の教科書を読めない学生は、社会学の専門書はもちろんのこと、新書ですら読むことが覚束ない。これでは、卒業論文が形骸化するのは避けられない。すでに、社会学科1年生の3分の1は、そうした学生になっている可能性が高い。この先、何をどうすればよいのであろうか。

### 注

- 1) 例えば、「一般の人たちにこの問題が広まったのは、二〇一八年に国立情報学研究所の新井紀子教授が著した『AI vs 教科書が読めない子どもたち』がブームを巻き起こした時だろう。新井は調査研究から、小学校のクラスのうち二、三人しか教科書を正確に読むことができていないことを明らかにした。本人たちは読めているつもりでも、実際は理解していないという現象が起きているのだ」（『ルポ誰が国語力を殺すのか』P.14）や、「AI（人工知能）に東大の入学試験を受けさせる『東ロボくん』で知られる新井紀子氏は、全国2万5,000人の中高生の『基礎的読解力』を調査し、3人に1人がかんたんな問題文が読めないことを示して日本社会に衝撃を与えた。問題の解き方がわからないなら解法を教えられるが、何を問われているかが理解できないとしたら授業は成立しない」（『もっと言うてはいけない』P.22）等に、その一端が描写されている。
- 2) 「読解力を調査するにあたり、理解できなければ、その人が不利益を被るような題材から出題することを、作問の基本方針としたからです。教科書はその代表例です。理解できなければ高校受験や大学受験で明らかに不利になります。新聞もそうです。読めなければ、世の中がどうなっているのかわかりません。そのような題材を理解することができる読解力こそが大切と考え、教科書や新聞を題材に選びました」（『AI vs 教科書が読めない子どもたち』P.188）
- 3) 杉田真衣氏が調査した東京都内のB高校（最低位校）卒業の女性は、性的サービス労働に関して「七割がそうした経験をもつか、その時点で従事していた」（『高卒女性の12年』P.153）という。
- 4) この筆者の漠然とした感覚は、数字でも裏付けられる。表6にみられるとおり、長野県は大学進学によって8割以上の高校生が県外に流出している。

四国をみると、香川県が県外流出率8割を超している。県内に相応の水準の私立大学がないためであろうか。関西に地理的に近い徳島県の県外流出率が、四国で最も低い理由は不明である。ただ表7にみるとおり、徳島県は人口規模に比べて国立大学の定員が大きいということは言える。2010年度と2020年度の数値を比べると、県外流出率は各県で安定的で、変化が小さいことがわかる。その中高知県は、8割を超えていた県外流出率が8ポイント低下している。2009年に高知工科大学が公立法人化した効果であろうか。

表6 大学進学による流出者の割合（流出率が8割を超える県と四国の県）（％）

	鳥取	和歌山	奈良	香川	島根	佐賀	長野	富山	高知	愛媛	徳島
2020年度	85	84	83	83	83	83	82	80	75	68	64
2010年度	86	89	85	82	85	86	83	80	83	68	65

注) 文部科学省「魅力ある地方大学の実現に向けて（仮称）（素案）参考資料集」掲載の図表より作成 <https://www.mext.go.jp/content/000141270.pdf>

表7 四国の国立大学の定員と当該県の人口（人）

	定員	人口
愛媛大学	1,770	1,341,539
徳島大学	1,316	726,729
鳴門教育大学	100	
香川大学	1,225	964,885
高知大学	1,075	693,369

注) 人口は総務省「令和4年1月1日住民基本台帳人口」より

- 5) ある松山東高卒業生は、高校時代に教諭から「お前らが愛媛大に行ってしまう。○高や△高の連中が行く大学がなくなるだろう」というような「進路指導」を受けたと語っていた。

### 参 考 文 献

- 新井紀子, 2018, 『AI vs 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社  
 石井光太, 2022, 『ルポ誰が国語力を殺すのか』文藝春秋  
 杉田真衣, 2015, 『高卒女性の12年』大月書店  
 橘玲, 2019, 『もっと言うてはいけない』新潮社